

# 事業報告令和2年度 教育事業 信州高遠ボランティア養成研修

令和2年11月7日(土)～8日(日)  
【対象】高校生・大学生・社会人  
【場所】国立信州高遠青少年自然の家

## 1. 趣旨

青少年教育施設のボランティアの役割を理解し、必要な知識・技能を習得する。自然の中で活動する楽しさを味わい、仲間と協働した学びあいから、ボランティア活動に対する意欲を高め、社会に貢献できる人材を育成する。

## 2. 事業の概要

(1)期日 令和2年11月7日(土)～8日(日)

(2)①参加者 39人 (新規ボランティア 25名、法人ボランティア 14名)

②内訳 高校生1名、大学生37名、大学院生1名(長野県34名、新潟県2名、神奈川県3名)

(3)日程

11月7日(土)		11月8日(日)
10:20 受付 10:30 開会式 10:40「青少年施設の現状と運営」 講師：国立信州青少年自然の家 所長 穴澤弘輝	新規ボランティア	9:00「安全管理Ⅰ 救急救命講習」 講師：国立信州高遠青少年自然の家 応急手当普及員 11:00「安全管理Ⅱ 感染症予防と対策」 講師：株式会社大塚製薬工場事業部営業部 小林繁
	法人ボラ	9:00「ボランティア交流会」 講師：ボランティア養成研修企画委員(法人ボランティア)
12:30「ボランティア活動の技術Ⅰ」 14:45「ボランティア活動の意義」 16:30「青少年教育」 18:50「ボランティア活動の技術Ⅱ」 講師：公益財団法人キープ協会環境教育事業部 主席研究員 増田直広		13:10「青少年教育施設におけるボランティアの役割」 講師：国立信州高遠青少年自然の家 ボランティアコーディネーター ボランティア養成研修企画委員(法人ボランティア) 15:20 閉会式

## 3. 企画運営のポイント

・法人ボランティアと新規ボランティアの合同開催とし、相互に交流する機会を持つことで新規ボランティアに対して今後のボランティア活動への意欲を喚起する。

・法人ボランティアによる企画委員を設置し、企画運営に携わってもらうことで、ボランティアの要望を反映した内容となるようにする。

## 4. 参加者の声と主な活動

・改めて施設の成り立ちや現状などを聞いて、自分たちの立ち位置などを再認識できた。新しい価値の創造、そこに関する若者の力に対する期待が伝わった。(青少年教育施設の現状と運営)

・自然を思いっきり生かして「いま」「ここ」五感を大切にすることが重要である。身の回りのものを当たり前と思わず身近な自然に着目すれば、いくらでも活動ができることを知った。雨の中の森を歩き、普段感じないような様々なことを感じる貴重な体験でした。インタープリテーションの見えるものから見えないものを伝えるという考え方に深く共感した。子どもたちに質の高いインタープリテーションを与えることができるボランティアになりたい。(ボランティア活動の技術)

・ボランティアとしてどうあるべきか、これまでの経験を踏まえて考えることができた。いいボランティアとは何なのか自分のボランティア観を見直す良い機会となった。(ボランティア活動の意義)

・SDGsを班の人たちと優先順位を考えるのは様々な見方があり難しいことではあったがだからこそ楽しかった。先輩や同じ班の人達と意見や考えを共有できて大切にすべきことを学べた。(青少年教育)

- ・救急救命は時間が空くと忘れてしまうため、再学習することが大切だと思った。感染症と脱水症状をからめた、興味深い内容で楽しく学習できた。（安全管理 救急救命講習、安全管理Ⅱ感染症予防と対策）
- ・みんなで施設について、活動について、法人ボランティアについて考え、今後の自分の成長につながっていくと思った。（ボランティア交流会）
- ・色々な企画があって最後は子供のどんな姿が見たいかを考えて語るなど企画を作った方々はすごいと感じた。自分も自然と関わって、人を楽しませる力をつけたい。ファイヤーやミニワークショップなど交流できる場があるのは本当に良かった。新しいボランティアの深くかかわれて楽しかった。（青少年教育施設におけるボランティアの役割）

開会式 アイスブレイク



ボランティア活動の技術



青少年教育、ボランティア活動の意義



安全管理



ボランティア交流会



青少年教育施設におけるボランティアの役割



## 5. 成果と課題

(1)参加者アンケート結果 事業全体を通して 満足: 35名 (89.8%)、やや満足 4名 (10.2%)

(2)成果

①企画委員の設置：

- ・1年生新規ボランティアに対して、直接の呼びかけや、zoom や SNS 使った、定期的な情報発信や問い合わせへの丁寧な返信による効果的な広報ができ意欲のある多様な参加者を確保することができた。
- ・現役ボランティア及び、新規ボランティアに対して学んでみたいことや身に着けたいスキルを調査し、ニーズを踏まえたプログラムを実施することができ高い満足度を得ることができた。（企画委員は委員として担当するプログラム以外にも広報、学びたい事などの要望集約、タイムテーブルの検討、細案確認等を行った）

②実施形態：新規ボランティアと法人ボランティアとの合同開催としたことで相互の交流により意識の向上やスキルアップが図られ、ボランティアの活性化につながった。

③広報：連携している信州大学の授業がコロナの影響で閉講となったが、1年生必修の野外活動の授業で広報をする機会を得ることができ1年生全員に向け広報することができた。

(3)課題

①日程：開始時刻を例年から1時間繰り下げたことで日程は忙しくなったが、遠方（長野、東京）からの参加者が前泊なしで参加できるためこの日程が望ましい。延期した日程が大学の集中講義と重なり、参加のキャンセルがあった。大学学務係でも把握できないものもあるが、できる限り大学の授業や行事と重ならないよう日程を調整する。

②プログラム：企画委員のプログラムと講師の講義内容が重複する部分があったため、急な変更が必要になった。企画段階からの打ち合わせを密にする。